氏　　名	松原詩乃（まつばらしの）

（論文内容の要旨）

本論文は、ヴェイユにおけるキリスト教思想の骨格を描き出す試みである。序論では、ヴェイユがキリスト教に向き合う際、いかなる足場に立って思索を進めていたかを明らかにする。そこでは二つの足場が分節化される。第一の足場は、キリスト教世界と非キリスト教世界の接合点である。これまで正統的とされるキリスト教がその価値を認めず、異教徒が捏造した虚構、単なる異端として片付けてきたものを再検証していく作業を通して、ヴェイユはキリスト教が名実共に「普遍的〔カトリック〕」となりうる可能性を模索している。つまり、教会の内部と教会の敷居の手前、キリスト教世界の内側と外側のいずれにも共通する同一の真理を見出し、それに照らしてキリスト教内部の影の部分と本来あるべき姿とを浮かび上がらせようとするのである。第二の足場は、被抑圧者・社会的弱者への憐れみや共苦を起点としてヴェイユが辿りついた「愛の狂気」である。社会において強者と弱者が存在している場合、両者の意志を一致させる必要性は追求されず、強者の意志のみが存在するかのように弱者は常に服従を強いられている。その意味で、双方にとっての正義を探求する対話の可能性が開かれることは「超自然的」な事柄なのであるが、そのような対話のために「権限を有しながらも命令を下すことを控える」行為の背景に、ヴェイユは「愛の狂気」を見てとる。それは、他者を生かそうとして退く創造主としての自己犠牲的な神の愛を模倣する態度である。この態度を自らの思索の足場とすることによって、ヴェイユは、力の神としての顔ではなく被抑圧者と共に苦しむ愛の顔に倣うという方向に自らのキリスト教思想を展開していくのである。

第一章では、キリスト教の外部を含む全存在へと無条件に注がれる神の普遍的恩寵をヴェイユが確信するに至った経緯を解明し、ヴェイユのキリスト教思想の独創性を明らかにすることを目指す。その際、カトリシズムとの三度の接触について言及されているペラン神父宛ての書簡「精神的自叙伝」、および自作の詩「プロローグ」、その他ジョージ・ハーバートの詩「愛」が手掛かりとされる。カトリシズム

との第一の接触は、女工として工場労働に従事した直後のことである。そこでヴェイユは、キリスト教とは、日々の労働に明け暮れる報いなき人間たちの宗教、すなわち「奴隷達の宗教」であるとの確信を得る。だが、神の普遍的恩寵の確信に深く関わったのは、むしろアシジの小礼拝堂における第二の接触である。ここでヴェイユは「私より強い何かが、生まれて初めて私をひざまずかせた」と告白している。受洗していないヴェイユがひざまずいたことの重要性を理解するために、本章では、この経験の数年後に記された詩「プロローグ」の内容を検討している。その中には、アシジでの実体験を元に構成されつつも、あえてヴェイユの手で意図的に異なる場面設定が行われている部分が数箇所ある。これらの箇所を詳しく検討することで、人間が「ひざまずく」のは教会建築の美しさのためでも、また、キリスト教という宗教の持つ歴史や伝統、教義のためでもないというヴェイユの理解が読み取られる。第三の接触は、ヴェイユが聖務に参加するためソレムに滞在した際のものである。この接触の後、ヴェイユはハーバートの詩「愛」を知ることになる。「愛」と「プロローグ」はいずれも、神による人間の無条件の受け入れを主題としており、聖餐を連想させる用語を用いつつ、神の食卓に与る恩恵を描いている。三度のカトリシズムとの接触および「愛」の影響を受けて創作された「プロローグ」の背景には、〈神は万人に注がれる無限の愛である〉という真理に到達できない人間の悲惨への洞察が存在している。

第二章では、普遍的恩寵の感受が原動力となって展開される独自の贖罪論を考察する。ヴェイユのキリスト教思想の内で最も独自性に満ちており、挑戦的でもあるのは、キリストの十字架解釈である。もし人間の罪の赦しが、ただイエスが十字架上で贖罪死を遂げた一度きりの「歴史的事実」によるのであれば、十字架以前の時代に生きたイスラエル・ユダヤ民族以外の人間達の救いはどうなるのか、との疑問が生じてしまう。ヴェイユはまさにこの問いを発している。十字架以前の人々の救済を確信するためには、何よりも十字架の出来事の解釈が重要になってくる。ヴェイユの贖罪論において、キリストの死という「犠牲」は、神に対する侮辱である人間の律法違反を償う和解の捧げ物としての儀式的意味を越えて、世界に拡大する悪

の循環を止めるという現実的働きをなすものとして再解釈されている。キリスト教は、イエスの死という歴史的事実を預言された救済の根拠として、また神によって定められた歴史的必然として解釈することから出発しているが、それに対してヴェイユは、イエスの死を偶然の惨事、一つの「不幸」として受けとめる。こうして、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」とのキリストの叫びが、罪なく苦しんでいる不幸な人々を代表する普遍的な言葉として解釈される。十字架上で死したキリストを生のモデルとすることで人間の内に拓かれる可能性、神が退いた必然性の世界における現実を見据え、悪をも虚偽で歪曲することなく受けとめて生きる可能性こそ、ヴェイユの考える十字架の救済である。

第三章では、〈神は私を愛さない〉と〈神は私を愛する〉という相反する二つの確信にヴェイユが認めている同時性に注目しつつ、人間の内に生じる逆説と信仰について論じている。ヴェイユによると、世界創造の際に偽りの神性である自由意志を与えられた「私」の存在が、世界内における神の退去を余儀なくしている以上、人間そのものは全く神の愛に値しない。〈神は私を愛さない〉という言葉は、このような人間理解に基づいている。逆に、神の愛に値しうるとヴェイユが考えるもの、それは神そのものである。すなわち、「魂の創造されざる部分」、「神の御子と同一の部分」と表現される部分であり、人間の魂の内に宿る純粋な善としての「キリスト」である。ゆえに、神によって愛される人間とは、創造によって与えられた自我を完全に神へと返却し、キリストが生の原動力となり代わっているような人間である。ヴェイユの理想とする人間とは、神無き世界において必然性の暴力に晒されつつも、一切の報いを期待せずに空しく待望する絶対的受動性としての存在である。生の原動力としてのキリストは、人間が神に哀願すべき「超自然的パン」であるとヴェイユは述べる。これは、魂における「真空」の保持とは矛盾しない。キリストを神に願うとは、むしろ真空を満たしうる自己の報いを退け、魂の飢えを抱えたまま、完全な善を求めることを意味するからである。人間の内に在って働くキリストという善なる生命を贈与されることで、愛を渇望する存在・愛の対象である人間存在が、キリストのごとく愛を行う主体への変貌を遂げるという出来事を、ヴェイユ

は神の恩寵として理解している。

第四章では、「祈りの一例」と題された断片の解釈を通して、ヴェイユにとって「祈り」とは何であるのかを解明する。「祈りの一例」前半部において、ヴェイユが祈りを通して注視しているのは、神無きこの世界で必然性の暴力に全ての力を奪われ、生ける「もの」と化した人間の姿である。このような人間の悲惨を認めることを、ヴェイユは「不幸の認識」と表現する。これは、神に見捨てられた十字架上のキリストや義人ヨブの姿でもある。ヴェイユにとって、善への願望とは、この耐えがたい悲惨へとあえて向けられる願望である。というのも、神の退去と引き換えになされた世界創造にとって、人間存在における自由意志の返却によって成立する神と人間との自己犠牲的な愛の往復が、その究極目的とみなされるからである。それゆえ、「祈りの一例」後半部では、神を自らの原動力とするような「もの」へと帰せられることへの願望が表明される。世界に不在である神は、原動力という形で人間と共にある。これがヴェイユの祈りにおける「インマヌエル」である。さらにそこから、捧げ物として「私」から神に返却された肉体と魂が不幸な人々を養う糧となることを求める願いが発してくる。こうしてヴェイユの祈りは、不幸の認識において他者と苦しみを共に分かつ「共苦」へと向かうことになる。神無き世界における人間的な脆さと、善なる原動力である内的キリストとが、人間において他者への共苦を可能にする二源泉となるのである。

第五章では、旧約聖書の神観に対するヴェイユの批判を扱っている。ヴェイユは旧約聖書中で描かれる暴力を、神の善性にそぐわぬものとして批判した。その根底にあるのは、神は「力」や「存在」である以前に「善」として理解されねばならない、という洞察である。旧約聖書では神が力の属性のもとに捉えられており、その結果、神性と悪魔性が混同されたまま、いずれも「神」の名で呼ばれることになるのである。このことは、「非人格的な人格」であるべき神の非人格的側面が見逃され、もっぱら神が人格として描かれていることと連動している。それゆえ旧約聖書では、人格としての神をもっぱら「仲介」として位置づけるキリスト論的な発想に場所が与えられることはない。こうした批判を導きとして、本章の後半部では、善

なる神観を前提とした「『主の祈り』について」でヴェイユが描き出す人間の六つの願望について解釈を進めつつ、人間が神と築く真なる関係性をヴェイユがどのようにとらえていたかを考察する。この関係性は、過去・現在・未来に関わり「全て」に向けられる願望を発動させる。すなわちそれは、〈純粋な善として神へと視線を向ける現在の願望〉、〈過去への全的同意としての信頼とも言うべき願望〉、〈愛の主体へと変貌と遂げる未来への願望〉がそこで同時的に表明されるような一つの祈りなのである。

氏　　名	松原詩乃（まつばらしの）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、シモーヌ・ヴェイユが晩年に展開した特異なキリスト教思想について、その根本問題を見定めつつ、そこからこの思想の骨格を描き出そうとした試みである。ヴェイユはその短い生涯の最後の数年にキリスト教へと急速にのめり込み、雑記帳に膨大な量の考察を残した。しかし他方で、彼女は洗礼を受けずに教会の「敷居」に留まることを選び、そうした立場から、世界の不幸を過剰なまでに強調し「存在しない神に祈る」ことを根本態度とするような独特のキリスト教理解を示した。

ヴェイユのこのような思想は、それに殉じたかのような彼女の突き詰めた生き方も相まって強烈な印象を与え、これまでそれについて多くのことが語られてきた。また、ガリマール社による全集の刊行が進む中で、かつての聖女伝のような著述は下火となり、信頼できる堅実な研究も増えてきた。しかし、ヴェイユがそもそもなぜそのような異様な形でキリスト教思想を展開しなければならなかったのかについて、きちんとした解明がなされたとは言えない。その点を十分に問うことなく、この思想自体をドグマ化するか、あるいは従来のキリスト教の枠内に引き込んでしまうような傾向を免れない研究が多いのが現状である。

そうした状況を見据えて、本論文は、ヴェイユがキリスト教と接触し独自の受容を遂げていく中でつねに立っていた「足場」を掴み出すことから始める。その足場とは、世界に遍く存在する不幸に接触して発動する「愛の狂気＝愚かさ(folie)」と彼女のラディカルな「普遍性」追求との本質的な結びつきである。序論でこのことを確認した上で、論者は、普遍的恩寵（第一章）、贖罪（第二章）、善への願望（第三章）、共苦（第四章）、力の神批判と善なる神への信仰（第五章）というように、ヴェイユ的キリスト教の基本的構成要素となる諸々の論点について、通常のキリスト教の立場と対比しながら丁寧な考察を繰り広げていく。ただしその場合にも、論者はヴェイユの思想を固定化してそれに依りかかるのではなく、それが生み出した破格の諸概念、諸表現を、彼女が立っていた「足場」との関係をつねに確認しなが

ら理解していく。そうしたアプローチによって、論者は晩年のヴェイユが飽くことなく問題にし続けた根本的な事柄を歪めることなく浮かび上がらせ、そこからヴェイユの思索の全体像を、その息遣いを感じさせるほどの生き生きとした仕方で繊細に描き出すことに成功している。この点に本論文の最大の美質がある。

このようなアプローチによって得られた成果は色々あるが、とくに注目すべきものとして以下の二点を挙げることができよう。

第一には、ヴェイユのキリスト教との出会いとその関係の深まりの経緯を辿るために、三回にわたるカトリシズムとの決定的な接触において起こった事柄を分析した箇所である。そこで論者は、この接触の事情を伝えているヴェイユの書簡や自作の詩などを取り上げ、単にヴェイユの実体験の描写や心情の吐露として受け止められてきた箇所を一個の作品として精緻に分析し直すことによって、そこにヴェイユが託した無条件的愛の普遍性の有りようを浮かび上がらせている。とりわけヴェイユの詩「プロローグ」に関して、「真新しくて醜い教会」という謎めいた場面設定や、祭壇の前でひざまずくことを求められた「私」の「まだ洗礼を受けておりません」という答えが女性形を用いていないことの意味などについて論者が繰り広げる解釈は、スリリングかつ秀逸である。こうした考察は、ヴェイユの優れた解釈者たちさえも通常のキリスト教的枠組に無意識にとらわれてそれらの問題に踏み込めていないさまを暴き出す批判と並行して行われることによって、さらに説得力を増すと同時に、ヴェイユの立つ「足場」に関する論者の見解にテクスト的な肉付けを与えるものとなっている。

第二には、創造と脱創造という組概念によってヴェイユが描き出す神人関係とキリスト教との関係について、きわめて説得的な見解をうち立てたことである。世界と人間を存在させるために創造において自らの力を自発的に放棄した「無力な善なる神」を一方に置き、魂の全き「真空」の中で不在の善を願望し続ける人間を他方に置くヴェイユの構図は、キリスト教を恣意的に活用した個人的な神学でしかないような印象を与えかねない。だが、神人間のこの自己犠牲的愛の往復において賭けられているのが、両者の間にはさまれた盲目のメカニズムでしかない「不透明な世

界全体の受容」という課題であることを論者は明らかにした。これは、従来のキリスト教の枠を破ると同時に、キリスト教を支えてきた普遍性追求をある仕方で引き継いだものである。ヴェイユのキリスト教思想のこうした屈折を浮かび上がらせることによって、論者はそれがもつ現代性の在り処を指し示すことができている。

もちろん、この優れた論文にも問題点がないわけではない。「普遍的真理」に関するヴェイユの見解には、彼女がキリスト教と出会う以前から親しんできたギリシャ的な諸要素からの影響が深く刻み込まれているのであるが、ヴェイユの独特のプラトン解釈や数論および宇宙論については、本論文では全く扱われていない。このことが本論文の主張をいささか一面的なものにしている。だがこれは、本論文の成果を踏まえて、今後の研究によって補っていくことのできる事柄であり、本論文自体の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、２００９年1月２２日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。